



タッチ・ミー
(後編)



別句通 〈bekkutooru〉

(前篇から続く)

○冷田神宮・遠景

鎮守の森が豪壮な大規模な神社。

かなりの賑わいを見せている。

○同・大鳥居

高さ15メートルくらいの巨大鳥居。

柱の基部の一番太い部分は直径3メートルくらい。

人待ちの多くの人々。

カジュアルに着飾った真紀がそわそわしてしきりに腕時計を見たり、通りかかる人波へ眼をこらしている。

真紀M「ああ、こんなに早くデートできるなんて、夢のようだー……野口さーん！」

○同・参道

拓也が人混みの中、やや緊張した顔で大鳥居のほうへ向かっている。

拓也「ごほっ、ぐすっ……はあ、やっぱ風邪なんて簡単に治らないな」

拓也は人混みの向こうに約束の鳥居を視界におさえた。

拓也M「そうだ。なんかあったかい飲み物でも買っていくか」

拓也は自動販売機へ向かう。

○同・大鳥居

真紀が落ち着かない様子。

真紀M「あーあ。でも話すこともないし、ちょっぴり不安な私？」

真紀が鳥居によりかかると、拓也がうつむき加減で近づいてるのに気づく。

拓也は真紀に気づかない。

真紀「あれは亀井！やだ。こっち来る」

真紀は鳥居のかげに身を隠した。

○同・参道

拓也はドリンクの缶を二個を持ち、大鳥居に近づく。

拓也「げほっ。え〜と、真紀ちゃん真紀ちゃん……と。げほっ」

鳥居の二本の柱を見比べる。

待ち合わせらしき人々は何人も見られるが、真紀の姿は見あたらない。

○同・大鳥居

たまたま中村翔太が真紀の近くにいる。

真紀は拓也からは陰になるように背中を向けて柱にへばりつく。

真紀M「こっち来ないで！あっち行って！」

拓也は別の柱をぐるりと一周する。

真紀は拓也の死角になるよう、支柱に沿って動く。

真紀M「もしかしてあいつもここで誰かと待ち合わせ？」

拓也が視界から消えている。

真紀「ほ。行ってくれたね」

拓也の声「石塚さん？」

背後から拓也の声が聞こえてくる。

真紀M「しまった！」

拓也は雑踏を縫って真紀のほうへ歩み寄ろうとする。

真紀は翔太のそばにしゃがみ込む。

真紀「いい子にしようね」

真紀は拓也に背を向ける形で翔太の頭をなでる。

翔太はあつけにとられる。

拓也M「なんだ人違いか」

拓也はそばの柱に寄りかかる。

真紀がちらりと拓也の様子を窺う。

拓也はぼんやりと宙を向いている。

真紀M「しめしめ。ばれなかった」

真紀は人混みも利用して拓也の視界を避けて反対側の柱のほうに移る。

○同・参道

少し離れた中村が翔太を手招きする。翔太は中村についていく。

中村「今のお姉ちゃん誰？」

翔太「知らなーい」

中村が離れつつ真紀を目で追う。

中村「あれ？あの子、最近ウチの店に来なかったかな？」

○同・大鳥居

別々の柱（AとB）のそばで陣取る真紀と拓也。

真紀は拓也に見つからないようにしている。

○同・柱A

拓也が腕時計を見てため息をつく。

拓也「真紀ちゃん遅いな……」

○同・柱B

真紀が腕時計を見てため息をつく。

真紀「野口さん遅い……」

○同・柱AとB（同時）

拓也、真紀、同時に携帯端末を取り出し、同時にそれぞれの番号にかける。

二人同時に端末を耳に近づける。

両方とも通話中のツーツ一音。

拓也・真紀（各々同時に）「話し中か」

揃ってため息をつく。

○同・柱A

拓也が携帯を切ると別の着信音。

通話に出る。

洋輔の声「拓也？俺。小百合と一緒にだけさ。お前今どこにいるんだ？」

拓也「ああ、実はまだ合流できてないんだ」

○同・参道

私服の洋輔が原小百合(24)と手をつなぎ本殿のほうから歩いて来る。

洋輔「この人混みだ。よく捜してみろよ」

拓也の声「うん……」

背後からパニック気味の喧噪が聞こえてくる。

男「待てー、そいつを捕まえてくれー」

衆人「きゃーっ」「おいーっ！」

浅井(36)の声「どけー！」

鞆を小脇に抱えた浅井が包丁を持って決死の形相で走ってくる。

衆人Aが浅井を追いかけている。

浅井は包丁を振り回し、行く手の人々を払おうとしている。

洋輔はそれを見て顔面がこわばり、小百合とつないでいた手をふりほどく。

洋輔「ごめん……！」

小百合「洋輔！」

洋輔は浅井を追って走る。

洋輔「おい！待て！！」

○同大鳥居・柱AとB（同時）

本殿のほうからざわめきが聞こえる。

拓也が振り返る。

拓也「ん？」

包丁を片手に鞆を抱えた浅井が走ってくるのが見える。

浅井「どけーっ！うらー」

浅井の行く手にいる人々はみな血相を変えて逃げようとする。

拓也はそれを見て眉間を引き絞る。

・・・ 真紀も顔面を恐怖にひきつらせる。

真紀「何なの？」

・・・ 浅井の背後から洋輔が走って追ってくるのも見えた。

拓也「兄貴ッ！？」 ・・・

真紀「あれは、野口さん？」

・・・ 拓也は持っていた二個のドリンク缶を握りしめる。

○同・参道

拓也は参道に飛び出し、走ってくる浅井を立ち塞ぐように立ちはだかる。

浅井「どけー！どきやがれ！」

浅井は包丁を振り回し走ってくる。

洋輔「拓也ーどいてろーッ！」　　・・・・

真紀「あっ！亀井君?!」　　・・・・

拓也が迫り来る浅井を睨み付ける。

拓也「ここここ、来い！」

浅井が包丁を振り上げる。

・・・・　　真紀が両手で口元をおさえ眼を大きく見開く。

・・・・　　拓也は手にしていた二個のドリンク缶を順次、浅井の足下に投げつける。

浅井の片足がそれを踏み、つんのめる。

浅井「うおっ」

浅井は完全に足下がもつれてつまづいて転んでしまう。

追いついた洋輔が浅井の両腕を後ろから抑え込んで包丁を落とさせる。

洋輔「おらーッ」

片足で浅井の背中を踏みつけ、力任せに地面に押しつける。

浅井「いてててて、いてえよお」

制服を着た八代を含む警官が数人駆けつけて浅井は連行される。

八代は親指を突き立てて洋輔や拓也たちに合図を送る。

洋輔と拓也は互いに目を合わせる。

拓也「手柄立てたじゃん！」

洋輔は険しい形相で拓也を睨むが、すぐに優しい眼差しの微笑みになる。

洋輔「お前のおかげだよ」

拓也も笑い返し、自分の額の汗を拭う。

真紀「野口さーん」

真紀が半泣きで飛び出して洋輔の腕にしがみつく。

拓也・洋輔(同時に)「え?!」

真紀「ご無事で何よりでした」

洋輔「き、君はたしか、石塚さん？」

真紀「さすが警察官ですね。ますます好きになっちゃいました」

真紀が潤んだ瞳で洋輔の顔を見上げる。

洋輔はとまどいの表情を示す。

拓也「あ、あの一、石塚さん……？」

真紀が洋輔の腕をつかみながら拓也のほうを見る。

真紀「あら、亀井君。あなたもかっこよかったわよ。いい武勇伝ができたね」

拓也「え？だから君とその一、ぼくが……」

真紀がきょとんとしている。

真紀「私、この人と約束してたの。あなたも誰かと待ち合わせてたんでしょ？」

真紀は顔を赤らめ洋輔に微笑む。

洋輔「？はあ……？」

拓也「ねえ石塚さん、昨日この鳥居で10時半に待ち合わせるって約束したよね？」

真紀「な、なんでそんなこと知ってるの？」

真紀は顔面蒼白になって洋輔の胸に寄りかかる。

真紀「野口さん、この人逮捕してください！きっと盗聴してるんだわ！」

真紀は泣きそうな顔になる。

洋輔「ねえ君。なんか勘違いしてるよ。野口って、ウチのじいさんの苗字だよ……」

真紀「は？」

拓也「それ、うちの兄貴だよ。名前は亀井洋輔一」

拓也は洋輔を指さす。

真紀「か、亀井洋輔……？」

真紀は掴んでいた洋輔の腕をゆっくりほどき離す。

小百合の声「洋輔～！」

小百合が泣きながら駆けてくる。

洋輔「小百合！」

放心状態の真紀が洋輔と小百合の顔を見比べる。

真紀「小百合……？」

小百合が洋輔の胸に飛び込み、洋輔の胸を軽くはたく。

小百合「馬鹿一。非番の日だってのに」

洋輔「見過ごせないよ。でも八代とか応援の署員呼んでくれたのお前だろ？」

真紀が眉間にしわを寄せてその光景を見つめる。

拓也が寂しそうに真紀を見つめると真紀と目が合う。

拓也「もしかして昨日、俺を兄貴だと思って電話してたんでしょ……げほん、げほん」

真紀「ごめんなさい！」

真紀は泣きながら駆け出した。

洋輔「拓也……」

拓也「兄貴が好きだったんだ……石塚さん」

拓也は洋輔のほうを振り向いてそう言うと、真紀を追って走り出す。

拓也は雑踏をかき分けながら真紀の後ろ姿を懸命に見失うまいと走る。

拓也「石塚さーん」

真紀はバス乗り場に停まっているバスに乗り込んでしまう。

○バス乗り場

バスは発進してしまう。

拓也「あーあ」

拓也が横を見ると、バス停のそばにレンタサイクル屋が店を出している。

○路上

交通量の多い幹線道でやや渋滞気味。

拓也はレンタル自転車を必死になってこぎまくる。

拓也M「真紀ちゃん！」

バスは断続的な渋滞で速度は遅い。

拓也は携帯を取り出しダイヤルする。

○バス車内

真紀は道路側の窓際席に座っている。

真紀は携帯の着信音に気づきバッグから端末を取り出す。

表示は”野口”となっている。

真紀はそれを見て一瞬ためらい、切る。

○路上

拓也は着信拒否された端末を一瞬切なそうに見つめ胸ポケットにしまう。

拓也「真紀ちゃ～ん」

道路の行く手前方は広い川にかかる長い橋である。

その先は歩道も無く幅員も狭い。

その橋で渋滞は解消されてしまい、どの車輛も速度をあげて通過していく。

拓也「やばっ……」

拓也は自転車を停める。

真紀を乗せて走り行くバスを拓也は立ち止まり見つめ続ける。

○『冷田(ひえた)』駅前ロータリー

バスが停まり乗客が降りてくる。

真紀も降りて、階段口のほうへ向かう。

そのバスの後ろにタクシーが停まる。

中から拓也が降りて、真紀へ走り寄る。

拓也「石塚さん！」

真紀が振り返る。

真紀「亀井君……？」

拓也「兄貴のこと好きになってくれてありがとう。残念だったけど……げほっげほっ」

熱っぽい顔の拓也が真紀に歩み寄る。

真紀は拓也と向かい合い、まぶたを重そうに下ろしてうつむく。

真紀「ごめんなさい。私が馬鹿な勘違いしちゃったせいでご迷惑おかけして……」

拓也「いいよ。お互い様じゃないか」

拓也が携帯端末からストラップを取って真紀に返す。

真紀がそれをおそろおそろ受けとる。

拓也「学園祭、がんばろう！」

真紀「うん」

真紀が眼に涙をためて微笑む。

背後で大きなクラクションが鳴る。

びっくりして二人とも振り返る。

拓也が乗ってきたタクシーの運転手が大声で怒鳴る。

運転手「早く料金払ってよー！」

拓也「いけね！……もう何も無かったことにしよう。お互い」

真紀はうつむいているままである。

拓也「それじゃあ、さよなら……」 拓也は踵を返した。

真紀「さよなら……」

真紀はぽつりと独り言の用に呟いた。

拓也「すいませ～ん……！」 拓也はタクシーのほうへ駆け寄る。

拓也M「あー！自転車も回収しないと！」

N(ナレーション)「拓也は治りかかっていた風邪がこじれて、その日から3日ほど寝込んでしまった……そして季節は変わる」

○名東(めいとう)大学・全景(夕) T”学園祭最終日”

○同キャンパス(夕)

大勢の学生や一般の人々でにぎわう。

中村と翔太の親子も見られる。

○同体育館・正面入口前(夕)

”名東(めいとう)祭打上げ会会場”の横断幕。

大勢の学生が集まっており、建物に入っていく。

○同内部

学生と一般の人々で賑やかな雰囲気。

拓也、絵里がいる。

小百合、私服の洋輔と八代らも見える。

洋輔「拓也、ゼミの発表会、良かったぞ」

拓也が洋輔に手を振る。

拓也「発表会、無事にすんでよかったね」

絵里「拓也と真紀のおかげだよ。がんばったもんね」

拓也「いやー。ぼくなんか大して役にも立ってないよ」

絵里「もう真紀に再挑戦しないの？」

拓也「いいよ。この数ヶ月の間、いい友達でいられたし」

拓也が離れている真紀を見る。

真紀は拓也と目が合いうつむく。

田村の声(放送)「恒例の打ち上げダンスパーティを行います。寂しい方はムードが盛り上がったら誰かをエスコートしてみましよう。今年も新カップル誕生か？」

会場にどっ、と笑いが起こる。

拓也「あれ？田村の声じゃん？」

DJコーナーの田村が親指を突き立てている。

絵里「ね。今年は彼、DJなの。私と踊ろ」

拓也「え。うん、いいよ」

田村の声（放送）「それでは一曲目。*****の*****」

甘いメロディの曲が流れる。

絵里にリードされぎみの拓也。

拓也「田村の奴に悪いな」

拓也の肩に顔を近づける絵里。

絵里「私が真紀だったらよかったでしょ」

拓也が少しうつむく。

照明が消えて真っ暗になる。

周りがざわめくが曲は続いている。

拓也「あれ？絵里ちゃん、離れちゃった。どこにいるの？」

田村の声（放送）「あらら。照明さん。どうしたのかな。とりあえず続けましょう」

拓也「あ。誰の手？絵里ちゃん？」

照明がついてぱっと明るくなる。

向かい合い拓也の腕を掴む真紀。

拓也「い、石塚さん！？」

真紀「こんばんは」

真紀がはじらうよな笑みで頬を染め拓也を見上げる。

拓也「な、なんで？」

真紀「あれから亀井君のことばかり考えてた。優しくて素直な亀井君が好きになりました。つきあって下さい。私と」

真紀が拓也にストラップを渡す。

田村の声「さっそく新しいカップルが誕生したようです。みなさん拍手を一！」

拓也と真紀を囲んで周囲の拍手。

八代「いいなー。チクショウ」

そばにいる洋輔と小百合が微笑む。

拓也「なんで真っ暗な中で僕がわかったの？」

真紀「それはね.....」

DJコーナーから見守る田村と絵里。

○DJコーナー

田村と絵里が拓也と真紀を見ている。

絵里「さっき踊ってる時拓也くんの背中に蛍光シール貼っといたんだ」

拓也の背中にシールが貼ってある。

田村「暗闇作戦成功！」

真紀が田村と恵理にウインクを送る。

○名東(めいとう)大学・全景(夜)

夜空いっぱいに星々がまたたいている。了

タッチ・ミー（後編）

<http://p.booklog.jp/book/76071>

著者：別句通〈bekkutooru〉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bekkutooru/profile>

*本作品はフィクションです。実際の人物・団体・事象等とは一切関係がありません。

*本作品の著作権はGK CIRCUIT LIMITEDが保有しております。

*本作品の2次利用は無償とします。ご利用される方はmail@gkccircuit.comか

若しくは<https://twitter.com/bekkutooru>

にツイート等してご一報下さい

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/76071>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/76071>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ